

創立40周年記念式典

温故知新

伊奈学園総合高等学校長 浅賀敏行

埼玉県立伊奈学園総合高等学校が創立40周年を迎えるにあたり、本日は同窓会の全面的なご支援を賜り、アトラクションと村山正宜さまによる記念講演を開催します。

また今年度末には、40周年記念誌を発刊する予定で、こちらは同窓会にご支援のみならず編集までご協力いただきます。同窓会に心から感謝申し上げます。

本校創立は1984年昭和59年です。当時の世相は、現代とは大きく異なり、経済が右肩上がり。こののちバブル経済としてはじけてしまうのですが、ジャパンアズナンバーワンと世界中の注目を集めた時代です。人口増加も著しく、埼玉県でも各地に県立高校が新設されました。

東北新幹線、上越新幹線が大宮駅始発で開業したのが1983年昭和58年、ニューシャトルの開業も同じ年です。伊奈学園の開校はその翌年ですが、ニューシャトル開業とも無縁ではないようです。

本校の創立10周年記念誌を紐解くと、当時の埼玉県知事の畑和さんが県政を振り返りながら伊奈学園のことを語っています。

私が知事選挙に掲げた標語は「15の春を泣かせない」でございました。中学校を卒業して、その先の高校が狭き門で、なかなか入学できないということがございましたので、30校の高校を建てますという公約をして当選したわけです。

確かに5年間で30校は建設をしましたが、それでも足りないということで、結果的にはご承知のように80校を作ることができたのです。当時の県立高校は75校でしたから、私が作った方が多いということになりました。

そういうことで最初は量が大きな課題だったのですが、ある程度見通しがついてきたと同時に、質の問題も検討しなければいかんという時期でございました。

文部省も量をたくさん作ることにこだわってか、学校団地という構想があったやに聞いております。その一つが千葉県の幕張の3校ということでした。

埼玉県でもやらないかという話を聞いて私はそれは面白い、しかし学校団地は褒められたやり方ではないと考えました。

落ちこぼれの問題が非常に言われておった時代でございますから、画一的な教育

は落ちこぼれを招く、その人の能力や何かを考えずにやっている教育の結果がそういうことになるのではないかと考えました。やはり個性ある教育をやる必要がありはしないかということが新しい学校設立の考え方の端緒だったろうと思います。

ですからどうせやるなら、埼玉県はひとつ個性ある教育を目指そうではないか。団地ではなくて、一つの学園にして、そこを今までかつてやったことのない3校分の生徒を入れた一つの学園にして、しかも選択の幅をたくさん増やすということにすれば、金にかかるかもしれませんけれど、多種多様な教育ができ、生徒も自分の好きな科目を選んで勉強に励むだろう。そうすれば落ちこぼれがなくなるだろうし、そういう一つの見本を作ってみようというような気持ちになりました。

では3校分の学校団地ならぬ学園を、果たしてどこに建設するか。その経緯がうかがえるのは当時の長井教育長の述懐です。

昭和54年1979年11月に、新交通システム関連地域環境整序計画の一環として、本校設立に対して知事の方から承を得ました。つまり知事の方からすると、シャトルを作るのに、逆輸送、つまり東京通勤者がいっぱいいるのですから、それに乗って大宮の方からこちらに来るお客を確保しなければならないという要請があったわけです。

それともう一つは、高校を作って15の春を泣かせないんだということ。しかも15の春を泣かせないで入った子どもたちに中途退学が多いということ。これは興味も関心も全く関知しないで、やみくもに画一的な事を教えることが一つの欠陥ではないかということから選択科目をうんと多くしたらどうかと。

それを断固としてやろうと動き始め、総合選択制高等学校基本計画が発表されたのが昭和56年1981年です。

昭和58年1983年にかけては予算要求、何しろ3校分ですから1校が20億円ないし25億かかるところで、初代校長の渋谷先生と知事がはじいた数字が100億円。私はそれを聞いたときに少し悪乗りが過ぎると話したのです。

こうして開校した伊奈学園は、集う生徒諸氏の活躍と諸先生の薫陶により輝かしい活躍を重ねてきました。全国のみならず海外からの視察が引きも切らず、文部大臣、フランス大使、そして時の天皇皇后両陛下のご来校と注目を集めました。これに応えるように甲子園出場をはじめ部活動が活躍し、累計3万3千有余名の卒業生が、あらゆる分野で目覚ましい活躍をしています。

これらの一つ一つにドラマがありエピソードがあります。たとえば平成5年1993年の天皇皇后両陛下のご来校です。陛下が高校を訪問されるというのは、全国でこれが初であり、その後も例がないと聞きますが、それは光栄であると同時に失礼の許

されない、学校のみならず町、県を挙げて緊張の強いられることでした。

その訪問が予定を大幅に延長して、いよいよお見送りのときです。吹奏楽部が「祝典行進曲」を演奏してお見送りしました。この曲は両陛下のご成婚を祝して、團伊玖磨が作曲しました。吹奏楽部の粋な計らいに陛下は、指揮者の宇畑先生に「思い出の曲をありがとう」と声をかけられたそうです。

そしてちょうど授業が終了したところのことです。教室の窓から女子生徒が「美智子さま！」と声をかけました。これは想定していないハプニング、一瞬のうちに緊張が張り詰めました。ですが美智子さまは、この生徒に対してにこやかに手をお振りになり、凍り付いた空気が和みましたというお話。その時の手を振られる美智子様の写真が今も校長室に、応接会議室に飾られています。

ですが、こうしたドラマ、エピソードは、すべてのハウスの60の教室で紡がれていることを、私たちは知っています。科目選択で自分が何をしたいのか悩み、自分に才能がないのではないかとくじけそうになったこと、部活動の大会で、いなほ祭で友人と感動を分かち歓喜したこと、すれ違いや意見の衝突で孤立したこと、クラスメイトが次々と進路希望をかなえる中、一般受験に向けて不安な思いに打ち勝ってひとり黙々と努力を重ねたことなど。40年間の年々に、60の教室のそれぞれで、日々さまざまなドラマが紡がれているのです。

そしてその一つ一つは、文字に記録されていなくとも、人々が口伝えで継承していなくとも、当人にとっては思い出すたびに胸の熱くなる、伊奈学園でのかけがえのない記憶なのです。卒業生が、かつて自分の過ごした教室を、グラウンドを、体育館を、書道室を見るまなざしの先には、今でも高校の頃の自分が鮮やかに躍動しているでしょう。

結びに、温故知新と言います。私たちの過ごすこの学び舎に、先人の様々な躍動が刻まれていることを知り、偲ぶことが、私たち一人一人の背骨を太く強くするということ。自分の将来をより確かにすることにつながるのだという意味です。

40周年記念に当たって、在校生諸君が40年間の伊奈学園の歴史に思いを馳せ、自己の存立基盤をより確かにしてくれることを強く願い、校長挨拶といたします。